

の努力と苦労は大変なものであったと推察される。これらを通覧すると、記事の区分がⅠ～Ⅴ部門の論文集に比較してかなり多くなっていて、学会誌との区別がつきにくいところもないとはいえないが、Ⅵ部門の読者層とみられる会員の人数と職種の高さを考えればむしろ当然かもしれない。しかし、創刊当初と同程度の編集努力を継続させることは容易ではないし、そうでなくても論文集は編集委員会の意図したものから会員のものへと成長すべきであると思われるので、今後は一般会員からの投稿の増加を図る必要があろう。それには、論文集と会誌の大きな相違が問題を深く掘り下げるといふ点にあることを強調したうえで、投稿原稿の区分を、たとえば論文、工事報告、技術報告、資料、などのように明快にして原稿をまとめやすくするのも一案ではないかと考える。

(筆者・Noriaki IWASAKI, 東洋大学教授 工学部土木工学科)

しい論文集である必要はない。

このような観点から、土木施工研究委員会の活動報告は意義深く読ませて頂いた。特に、建設業に研究機関の委員を含めた活動から何が生まれるかということに、大きな期待をもっている。さらに今後、誌上で多くの立場の人々が議論するためには、問題提起というか質問のようなものを載せてもよいと思う。そして、その解答となるような論文が出るようならば大成功である。もう1つ、論文集への貢献に対して、土木関係の資格審査などに考慮するというのは行き過ぎであろうか。

いずれにしても、4号の段階ですでに互に関連性のある論文も掲載され、この分野の知識・技術の集積が始まっているのを感じる。

(筆者・Masahiko ISOBE, 横浜国立大学助教授
工学部建設学科)

論文集らしからぬ論文集

磯部 雅彦



第Ⅵ部門の論文集もすでに4号まで発行され、総頁数にして623頁にもなった。この機会に目次を並べて見ると、論文集なのか学会誌なのか一見区別がしにくいような内容となっているというのが第一印象である。展望・解説あり、対談あり、さらにはこのような「つうしんらん」ありで、私の専門である第Ⅱ部門などと比べると、相当型破りな論文集といえるだろう。しかし、だからこそ私でも読んでみようという気になるのだから、第Ⅵ部門小委員会の創意・工夫が当たっているわけである。特に、招待論文や展望などで、それぞれの分野の歴史・現状を知ることができるのはまことに有難い。

最近、随分世の中が理屈っぽくなり、研究・調査・計画・設計・施工の一貫性が強く求められるようになったようである。このためには、それぞれの分野の人々の知識・興味の対象が、立体航空写真の場合のようにオーバーラップする必要がある。そこで、第Ⅴ部門までのいわば部分品と設計・施工という完成品とを結びつけるための橋渡しの役割を担うのが第Ⅵ部門であろう。したがって、いわゆる学問的研究と現場での実務とが触れ合う場となるのが理想であり、このためには必ずしも論文集ら

第Ⅵ部門論文集への期待

魚本 健人



第Ⅵ部門の論文集が発刊されてから、もうすでに2年が経過し、4冊が出版されている。最初は論文も招待論文が多かったが、投稿論文も徐々に増えており、私も論文編集委員会の一員として、喜ばしく思うと同時に担当委員諸氏の努力が実りつつあるものと考えている。

第Ⅵ部門の論文集は、従来の部門だけでは対処しきれないような境界領域の問題や、新たな学術研究問題を主に取り扱うことになっており、今後行われる新たな研究部門を一手に引き受ける重要な部門である。今日、大きなプロジェクトとして行われている多くの土木工事等では、土木、機械、電気等のハードウェアから、計測、評価、解析等のソフトウェアに至るまで、幅広い情報と各分野を結合させる技術・知識が必要とされる。第Ⅵ部門の論文集は、このような場合に得られる技術・研究結果を報告する場の1つであるといえよう。

第Ⅵ部門に関する技術・研究を論文として発表する場合に大きな問題となる点は、その内容の多くが、関係者にとって最新のノウハウに属するものが多く、また、他の部門に比べ実証するに足るだけのデータ等を提示しにくいこと等であろう。前者については、特に公共性の高

い土木工事において関係する各省庁や会社の理解と積極的な取組み方に期待したい。また、最新のノウハウに対する会員諸氏の公正な評価が行われるようになることも大切であろう。後者については、難しい場合もあるが、読者がその内容を十分に評価できるだけのデータ、理論等を提示することが必要である。

現在、第VI部門の論文集は全会員に配布されているが、他の部門と同様に有料化される方向に進んでおり、早く他部門の論文集と同じレベルに達するよう望んでやまない。人によっては第VI部門の論文こそが今後の土木技術を発展させるものであると知っている人もあり、一方では論文集というよりも協会誌的な色彩が強いと知っている人もある。これは、この論文集が現在まだ過渡的な段階であるための評価であると考えられるが、良い論文が多く集まるようになってくれば、おのずと評価が固まるものと思われる。

このような現状をふまえ、会員諸氏のこれからますます多くの良い論文が投稿されるよう願ってやまない。

(筆者・Taketo UOMOTO, 東京大学助教授 生産技術研究所)

ビッグプロジェクト考

大 草 重 康



第VI部門が独立した部門として論文集を発刊してから早くも3年目に入った。私のように根が土木の門外漢である者にとって、この論文集は大変ありがたく、従来の土木学会誌からも論文集からも得られなかった知識を得ることがで

きる。一方、第VI部門の編集が他の部門に比べて苦勞が多いということも、編集調整会議に出席させてもらっている関係上わかっているつもりである。そのようなことを承知のうえで日頃考えていることを少しばかり書かせてもらうことにする。

世の中が不況になると大型土木工事の企画といったものが必ず話題になる。土木技術者にとって大変ありがたいことではあるが、そのことと世間一般が大型土木工事をどう思っているかということは別問題であろう。まして、ある大型土木工事が本当に「後世への最大遺物」になるかどうかというような根元にかかわる問題が真剣に論じられたということを開いたことはない。社会資本の

充実ということが簡単にいわれているが、大型土木工事や公共投資が文句なく有用な社会資本に転化すると信じるのも、あまりに楽観的にすぎるのではないだろうか。

内村鑑三という人は、日本の近代思想史上に巨大な足跡を残した人である。広井公式で知られる広井勇とともに札幌農学校のクラーク先生の同門であり、内村の一高時代の教え子に、後に信濃川大河津分水工事をなしとげたキリスト者でありエスペランティストであった青山士がいる。内村が1894年夏にキリスト教徒の夏期学校で行った「後世への最大遺物」という講演は特に影響が大きいものであるが、その中で彼は後世へ遺すものとして「お金」、「土木工事」、「思想(文章)」を挙げたうえ、どれも実業家になってお金を遺せるわけではなし、土木技術者になれるわけではなし、文筆家になれるわけではないと知っている。結論として内村は誠実に生きる個々人の生き方が最大の遺物になるのだと知っている。幸いにしてわれわれは、内村のいう遺物の中の土木の分野に関連しており、その学会の会員である。現在行われつつある大小の土木工事、あるいは大型プロジェクトといったものが、内村鑑三のいう意味で後世への遺物になり得るのかどうか検討してみる必要がありはしないだろうか。また大河津分水完成時に青山士が書き残した「万象に天意を覚めるは幸なり、人のため、国のため」というような気持に会員大多数がなっているのかどうか。第VI部門の論文集がこのような内容にふみ込んだ討論の場になることを期待している。青山士が天に感謝しながら完成し、後世への遺物になると信じて疑わなかった大河津分水でさえ、後年に種々の問題を遺すことになった事実を忘れてはなるまい。

(筆者・Shigeyasu OKUSA, 東海大学教授
海洋学部海洋土木工学科)

3年目を迎えた第VI部門論文集に望む

河 上 省 吾



第VI部門論文集編集委員会が企画力とそれを着実に実現する実行力とによってすばらしい論文集を作ってくれたことにまず敬意を表わします。

土木学会の構成員は大学・官庁、建設業、コンサルタント、土